

発達 7 (246~252)

座長 天野 清・岩田純一

- 246 間接的要求の理解における文脈の効果
お茶の水女子大学 仲 真紀子
聖心女子大学 無 藤 隆
- 247 間接的言語行為理解と発話者認知の発達的研究
248 (I)(II)
(I) 東京大学 橋 元 良 明
(II) 東京大学 村 田 光 二
- 249 成人におけるレファレンシャル・コミュニケーション方略
——メッセージ評価と修正について——
九州大学 田 中 孝 志
- 250 小学校児童の文の統辞・意味論的構造の自覚の発達
国立教育研究所 天 野 清
- 251 児童の言語的比喩能力について
金沢大学 岩 田 純 一
金沢竹又小学校 由 井 美緒子
- 252 児童の文章記憶における諸条件(統報)
名古屋聖霊短期大学 細 井 葉 子

I 質疑の概要

仲(246)に対して、田中(九州大)から「直接要求文」の定義が質問された。仲は直接要求文には聞き手へ要求する行動が動詞に含まれ、かつ「…して下さい」という表現が明示されていると答えた。

橋元・村田(247, 248)に対し、金子(金沢大)は、小2のような低年齢の子どもにとって、人物評定に使われる尺度は、むずかしいのではないかと質問した。それに対して、村田は、意味のわからない言葉は、随時質問させ、できるだけ、詳しくその意味を理解させるように配慮したと答えた。山内(九大)は、人物像の読み込みの発達が青年期初期から盛んになると指摘し、被験児として中学生のはじめの段階がふさわしいのではないかと述べた。金子(金沢大)からも類似の意見が出された。

細井(252)には、山内(九大)から、Paris流の課題も加えて実験すればよかったのではないかという意見が出された。

II 討 論

橋元・村田(247, 248)に対して、仲(お茶大)から人物プロフィールの評定に、これら6つの尺度を選択した理由が質問された。村田は、次のように返答した。6つの形容詞対のうち2つは発話行為理解と直接に関係あ

るもの、また「明るさや親切さは一般的評価の次元を代表するもの、さらに、強さや頭のよさの2つは強さ、有能さの次元を代表するものとして選ばれている。天野(国教研)から、これらの研究では、発達段階を明らかにすることを意図しているのかどうか質問された。村田は、これに対して、発達段階というものは想定しないと述べ、むしろ推論のプロセスをさぐる手がかりとしての研究であると返答した。

田中(249)に対して有馬(広大)は①メッセージ作成者条件が評価者にどのような影響を及ぼすと考えるのか? ②評価者は「伝え手がこのメッセージを誰に向けて作成したか」ということを考えて内容を評価したのか?の2点について質問した。田中は、①に対し、作成者を被験者の権威関係がメッセージの信頼度に影響を及ぼすことが考えられる。②には、本実験では明らかでないがそのような変数が情報の評価に影響を及ぼす可能性はあると述べた。

天野(250)に対して橋元(新聞研)は、名詞-形容詞述語文はどのように分析されるのかと質問された。光田(徳大)からも同様の質問がなされた。天野は、本実験のカテゴリーだけでは不十分であり、別のカテゴリーを導入する必要があると答えた。また橋元は、日本語の格文法分析には多くの解明されない問題点もあり、このような構文分析で学習を進めていくと後に混乱が生ずることはないかとの疑問を述べた。光田は、言語の自覚の発達はいつ頃からか?との質問を行った。天野は、言語要素によって異なると思うが、音節の意識化ができる4歳台後半に、文の順序、語構成についての初歩的な自覚化ができはじめると答えた。

岩田(251)に対して秦野(道灌山)は、まずすべてのタイプ文が理解できることを前提として文のpreferenceを問題にすべきであると指摘した。また、課題のgroundは、子どもと大人では不一致のある場合が多いのではないかと課題文を作る際の留意点は? それに対して岩田は、課題文の作成には問題点も多いが、一応我々の観点からgroundの基準を作りそれとの一致率を検討したと答えた。また年少で不一致率が高いが知覚groundを概念的groundで理由づけたのは見られなかったと補足した。更に山内(九大)や秦野から何故、12歳前後でliteralな反応が急上昇するのか?との質問がなされた。岩田は、現在の所、明確にはこの現象を説明できず今後の問題となると答えた。また、比喩理解における文脈の重要性が西本(お茶大)から述べられた。(岩田 純一)